

# 学生のページ

## 海外に羽ばたく

### 第8回 日本のエンジニア，日本のエンジニアリング

みずたにかおり きゅうばひろこ  
水谷香織・休場裕子

前回に続いて外国人の方の登場です。パシフィックコンサルタンツで働く技術者，スディール・ブラダンさんは，母国ネパールでの就業経験もあります。大阪にあるブラダンさんの職場で，またまた英語でインタビューさせていただきました。

English version is available at <http://www.jsce.or.jp/journal/student/>

#### スディール・ブラダン氏 (Mr. Sudheer PRADHAN)



1964年4月  
1988年6月  
1988年10月 - 1989年3月  
1989年4月 - 1990年3月  
1992年3月  
1992年4月 - 1994年12月  
1995年2月 - 1996年6月  
1996年6月 - 現在

ネパールのカトマンズで生まれる  
ルールキー大学(インド)土木工学科卒業  
神戸YMCA日本語学校で日本語を学ぶ  
神戸大学にて研究生  
神戸大学 修士課程修了  
奥村組で現場技術者として働く  
カトマンズ(ネパール)でフリーの技術者として働く  
(株)パシフィックコンサルタンツでトンネル技術者として従事

インタビューに応じて下さり有難うございました。今日は，ブラダンさんの日本とネパールでの土木技術者としての経験を中心にお話しいただきたいと思います。

まず，はじめに，ネパールでの大学進学について教えてください。

ブラダンさんのようにインドの大学に行くことが一般的なのですか？

ネパールでは，当時，工科大学は1つもありませんでした。ですから，技術者や医者になりたい学生は外国で学ばなければなりませんでした。そんな中で，ほとんどの学生は，インドに行きました。隣国であるインドは，さまざまな面で溶け込みやすく，文化や食べ物も似ていましたから。ネパール人にとっては，インドで生活することは，そんなに大変なことではなかったのです。

ルールキー大学には，ネパール人学生がたくさんいたのですか？

そのときは，あわせて250人ほどのネパール人学生がいました。だから，私自身は，外国に住んでいるという感じではなかったですね。

ブラダンさんは，国連開発計画(UNDP)の奨学生でしたね。

奨学金なしでは，外国の大学に行くことは難しかったですね。当時，UNDPはネパールで計画されていたある水力発電プロジェクトの要員として，5年間で250人のネパール人学生に奨学金を出していました。残念ながら，そのプロジェクトそのものは実現されなかったのですが。

大学を卒業後に，日本へいらしたのですよね。

なぜ，さらなる勉強のために日本を選んだのですか？

それは，本当に偶然のことだったんです。私が学部生だったとき，日本の旧国鉄の技術者である広瀬さんを，ネパールの田舎町の建設現場に案内する機会がありました。彼は，Peace Health Development というNGOでボランティアをしていて，私の父の知人でした。私が大学を卒業したときに，広瀬さん一家が日本の建設現場を見学させようと私を日本に招待してくれたんです。広瀬さんも土木技術者であり，私が日本のインフラを目の当たりにするのはいい勉強になると思ってくれたんです。

そのときに、広瀬さんの指導教官であった神戸大学の桜井教授を紹介していただきました。桜井教授は、当時新しいトピックだった岩盤力学を専門としていました。その場で、2、3時間話し、彼の研究グループの一員に私を歓迎してくれると言っていたみたいです。

そして、日本での勉強を決心したのですね。

はい。もちろん、決める前には、家族やフィアンセに相談しましたよ。

日本で勉強していた間、どのように生計をたてていたのですか？

1990年に奨学生になるまでは、いろんなアルバイトをしました。

インドと日本での学生生活の違いはどんなところがありましたか？

インドでは、近隣に住む学生以外は皆、大学の寮に住み、食事もある食堂でとらなければなりません。日本の学生とは違い、アルバイトは禁じられていました。その代わりに、大学内でさまざまな社会的活動の場があり、インド各地へ小旅行の企画などもありましたよ。

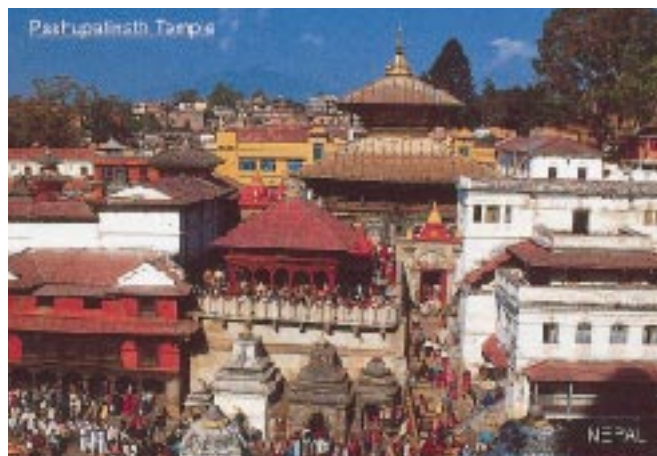
その後、日本で働きはじめたのですね。

修士課程を修了後、ゼネコンに就職されましたね。それはどうしてですか？

博士課程への進学も考えましたが、桜井教授とも相談した結果、進学の前に実務分野での経験を積むことを選んだんです。

ゼネコンでの仕事はどうでしたか？

現場技術者の仕事は、体力勝負のルーチンワークが主で、私が考えていたものとは違っていましたね。私は、構造解析や数値解析といったデスクワークを望んでいたのです。現場技術者として3年弱働いた後、私の望む仕事を探すためにネパールへ戻ることを決心しました。



ブラダンの生まれ故郷の近郊の風景（絵葉書より）



神戸大学の留学生の集い

カトマンズでは、フリーの技術者として働いていましたが、フリーで働くというのは、ネパールでは一般的なことなのですか？

はい。多くのフリーコンサルティング技術者がいますよ。契約をベースに仕事をするんです。

フリーの技術者としての仕事はどうでしたか？

コンサルティング技術者として、いくつかの水の供給プロジェクトに携わっていました。実は、トンネルプロジェクトの仕事がなかったのですが、当時ネパールでは適当なトンネルのプロジェクトは無かったのです。

そこで、再度桜井教授に日本でコンサルタントの仕事はないかと相談し、パシフィックコンサルタンツで技術者の募集があるとの情報をいただきました。

桜井教授はいつもあなたを応援してくださいませね。

はい。桜井先生は、とても寛大な方で、いろんな面でお世話になっています。

日本とネパールの両国での技術者としての仕事を経験していますが、どこが違いますか？

ネパールでは、技術者同士の関係はとても気楽です。先輩とか後輩といった概念はなく、友達のように一緒に働きます。日本では、話す相手によって言葉を選ばなければいけませんよね。

さらに、日本の技術者は、長時間働くのが好きなように思えます。数日家に帰らなかつたりすることが時々ありますよね。本当に忙しく、どうしても必要という時期なら、理解できますし、私でもそうするのですが、そうでない時期には、家で家族と一緒に過ごす時間をもっともった方がよいと思います。

ネパールでは、とくにヒマラヤ山系に独特の自然資源がありますね。少し、環境の話をお聞きしたいと思います。

ネパールでは、環境に対して、何か特別な視点をもっていますか？

現在は、都市部にのみ、環境問題が発生しています。国としての環境に対する意識は高いと言えませんが、高等教育を受けた人々は、自分たちなりの環境保護の在り方を探っています。

この10年、ネパールの全てのものが急速に変化をしています。例えば、経済成長により、自動車が都市部で増えて、排気ガス問題を引き起こしています。しかし、その対策として、ガスや電気で走る自動車が、かなりのスピードで普及してきているように思います。

開発と環境の間で何か問題はありますか？

カトマンズ付近では、最近人口が集中してきていて、生活用水が不足しています。システム化された下水道設備がないのも、大問題なんです。新しい水供給のためのトンネルプロジェクトが、今始まろうとしています。これは、山岳地域から水を運ぶためのトンネル建設のプロジェクトではありますが、環境への影響を極力減らすようベストを尽くすはずです。

それでは、将来の話をお聞かせください。

今後も、日本で仕事を続けたいですか？

今のところは、はい、そうですね。ここにはまだ学ぶべきことがたくさんあります。しかし、Ph.D. コースで勉強することをあきらめたわけではないんですよ。私の妻と娘は以前は日本で一緒に暮らしていたんですが、最近日本とネパールを行き来しています。遅くとも40歳になる前には、今後どうするかを決心をしたいと思っています。



大阪ネパール協会の集まりにて

最後に、学生へのメッセージをお願いします。

最近、日本の若い人々が実社会においてお互いに十分なコミュニケーションを図っていないような気がしています。多くの若者が、家族と過ごすよりも1人であることを好んでいるように思えます。人と人との関係を通じて他の人の感情を理解することは、私たちにとっても重要なことです。どうか、あなたの周りにはいる人たちと、本当の友好関係を深めて下さい。

どうもありがとうございました。インタビューはとても楽しかったです。プラダンさんは、常に仕事への望みを追求し、前進しています。日本では、時々、一度職に就いた人たちが、積極的に生きるモチベーションを失ってしまっているように感じます。いつも望みを忘れないでいたいと思います。

この記事に対するご意見・ご感想は下記までお寄せください。

E-mail : edi@jsce.or.jp